

## 泌 尿 器 科 紀 要

第 14 卷 第 11 号

1968年11月

## 随 想

パリで開催された第6回国際家畜繁殖ならびに  
人工授精学会に出席して

京大農学部教授 西 川 義 正

国際家畜繁殖ならびに人工授精学会 (International Congress on Animal Reproduction and Artificial Insemination) は原則として4年に1回開催されるが、第6回学会は1967年7月21日から25日までの期間パリで開催された。筆者はこの学会に出席する機会をえたが、以下その概要を記する。

参加国は約60カ国、参加人員は約700名であり、日本からは筆者を含め4名が出席した。今回の学会では発表者の持ち時間を少なくとも1人10分にしたいということから、出題数を約300題に限定することとし、一般から広く募集された。出題数は総計317題であったが、これらをつぎのごとき10のトピックスとその他に分けて分類され、3つの会場で発表と討論が行なわれた。

1. 雌の生殖器道内における精子の capacitation および生存の生化学的知見……15題
2. 哺乳動物における精子形成と精子の微細構造……30題
3. 温度と哺乳動物の受胎……23題
4. 胚の早期斃死とその診断……26題
5. 不妊の免疫学的知見……17題
6. 染色体異常と性異常……12題
7. 脊椎動物の人工授精の新しい技術……32題
8. 受精能と精子保存の生化学的知見……54題
9. 人工授精と近親繁殖……5題
10. 性周期の同期化と受胎……45題
11. その他……58題

以上のトピックスはいずれも現在家畜の繁殖分野で関心が持たれ、研究されているおも

なものといえる。これらの大部分は International Congress on Fertility and Sterility が行なう 研究発表会の内容とも直接関係のあるものである。International Congress on Animal Reproduction では出席者の大部分は 畜産関係者であるのに対し、International Congress on Fertility and Sterility の方は医学関係者とみてよい。ただし前者にも医学の研究者が参加しているのを例外とみることができない。スウェーデンの Dr. Belonoschkin (精子関係の研究者) などは毎回顔を出している医学者の 1 人である。

以上の原著論文のほか、会期中につぎの 6 つのシンポジウムが催された。これはあらかじめ話題提供者が決められており、おのおの数分発表したのち討論するという、いわゆる普通にみられるシンポジウム形式がとられた。

1. 馬の人工授精
2. 鳥類の人工授精
3. 哺乳動物卵子の採取と移植
4. 羊および山羊の精液の希釈と凍結保存
5. 雌生殖器道のグリコーゲン含量
6. 家畜の性行動

これらのテーマのうち雌生殖器のグリコーゲン含量を除く他のものは、最近家畜分野でなるべく早い機会に解決を望まれている技術上の問題点とみてよい。

この学会はこれまで 6 回ともヨーロッパのどこかの国で開かれている。したがって従来とも経費の関係で日本からの出席はせいぜい数名程度である。しかし日本における家畜繁殖分野の研究の進んでいることがよく認識されており、これまでも日本に対し特別講演や座長の役割がふり当てられており、今回もまた座長（フランスのこの学会では座長を chairman といわずに president と呼んでいた）指名講演 (discussant) やシンポジウムにおける話題提供の依頼があった。

本稿では 個々の研究発表題目やその内容に触れることは紙数の関係でとてもできないが、そのほとんどは日本不妊学会でとり扱っている内容そのものか、またはそれに酷似しているものである。したがって日本不妊学会の会員のかたがたもこの学会に関心をもっていただき、裨益していただけると相互にうるところが多いのではないかと思考している次第である。